

やっと見つけた 夢へのトリセツ

山口県 防府市立右田中学校 3年
光田 圭佑

「ただいま。」言い残すと足速に階段をかけ上がった。勉強机に落ち着くと、ため息と共に、鞆から数学の教科書を引き抜く。その手は小刻みに震え、顔は紅潮していた。一度、ページをめくった。しかし、その香りや温かさにも恐怖を覚え、いつしか深い眠りの中に、自分の影が引き込まれていた。

ある日の授業のことである。もう梅雨は終わり、蟬の精一杯に鳴き続ける声が、初夏の空に染み渡っていた。「起立。気を付け、礼。」「お願いします。」多少のずれをも気付かせないような轟音が、周囲をとりまく。いよいよ始まった。自分の苦手な数学である。クラスは、三十人程の整った学習環境が設けられていて、自分の成績は、その中間程度。いわゆる「凡人」なのである。何か大きな夢があるわけでも、ひときわ目立つ才能があるというわけでも無い。部活でも何も残せていない。そんな普通な自分が、最も苦手なこの数学で初めて手を挙げ、発表しようとしているのだ。その似つかない、奇跡的なシーンに全員の視線がその指先に集中する。「はいっ」その一声で、クラスの空気は凍てつく氷山の頂の、氷の断片のように研ぎ澄まされてしまった。「はい、答えをどうぞ。」本当に自分が当てられている。クラスの代表として、この問題に挑む挑戦者として、自ら名乗りをあげたのだ。「自分は勇者だ」と胸の内に言い聞かせ、大きく口を開く。「答えはルート5です。」隣のクラスまで届いていたかも知れない。皆の拍手と歓声を待った。しかし、自分の耳にそれが届くことは無かった。少しの沈黙を経て、周囲から込み上げる様な笑いと罵声が波を描いて広がった。五～六秒の事だったのだろう。しかし、自分は二～三時間もの時の長さを感じた。それが止むのと共に、先生の声が響く。「マイナスを忘れないようにしましょう。」そんな自分が悔しくて、悲しくなった。

一数学の授業が終わった。しかし、その後の授業にも、部活にも力が入らなかった。他の人達は皆、普段通りの日常を普段通りにこなしている。それなのに「自分一人、取り残されている。」そう感じた。そして、その場にいたたまれなくなり「体調不良」という口実で部活を早退させてもらった。自転車に乗る。この日頃から当たり前にしている事すら、ふらついて、何度も標識やガードレールに衝突しかねた。そして、ようやく家まで辿り着いたのである。

「はっ」と目が覚めた。夢の中であの様子が思い出されたのだ。その途端、やっと気付いた。悪いのは他人ではなく、自分自身にあったのだと。もう一度、教科書を開く。そこには無情にも、理由付きで詳し過ぎる程の解説がなされていた。細かく読むと、更に悲しくなった。なんと、記号を用いて「注意」と表してあるのだ。他にもたくさんの事が、自分にも分かるようにしっかりと載っていた。教科書をあまり使用することのなかった自分は、驚きと共に恥かしさも感じた。そして思った。「教科書はそれぞれの教科の内容だけではなく、これから自分が目指すもの『夢』への最短ルートが事細かに示されている、まるでカーナビのようなものだ」と。それ以来、欠かさず授業の前後とテ

スト勉強には教科書を使うことにしている。すると、今はクラスでも上位の成績として皆に頼りにされている。それが嬉しい。真逆の立場に立つとは思っていなかった。本当にそれが嬉しくて、視野も広がったと思う。

「面倒くさい」、「面白くない。」最近よく耳にする。自分自身、そう感じることもある。そんな時は、この言葉を思い出す。「面白くなければ、諦めればいい。楽しくなければ、笑わなければいい。それが目的を成し遂げる為の最短ルートなら。」これは、中学校の先生に掛けられた最も印象深い言葉だ。これには、「自分に合ったものを早く見つける」ことが何かを達成する為に必要である、つまり「その過程が大切だ」と直接言われた様な、強い衝撃を受けた。それまでは、成功すれば何でも良いと思っていた。しかし、その瞬間から全てが変わった。テストも同様、良い点を取ることにだけ価値がある訳ではない。地道に、教科書を睨み続け、積極的に進んで発表することが、簡単そうで最も難しい、言わば「ダイヤモンドの原石」なのである。その原石を磨くことは、本当に難しい。故に、大半の人々はあと少しの所で限界を覚え、その手を置く。最も身近な所に、その「取扱説明書」が存在するのだというのに…。今の自分達にとって、それは『教科書』なのだ。そう、それに気付いた時、自分は変わる。夢を見ることができるのだ。

「テスト返すぞ〜。」先生の声が鳴り響く。出席番号順に返却された。ゆっくりとその答案と向き合う。あの時の様な緊張が体中を駆け巡る。なんと、右端には「百点」とあった。夢から覚めていないのだと自分を疑った。しかし、現実であったのだ。全ては、あの一冊から変わった。